

「土着的近代 Indigenous Modernity」とは何か (付: 熊沢蕃山)

Zoom: 共同研究「土着的近代」③ 2023/3/18 大橋 健二

I 極私的「土着的近代」の意味と意義

1, 土着的近代とは ⇒ 思想・哲学・宗教のほか、文明論・政治論・社会政策論的アプローチの必要

①北島義信・土着的近代研究会会長による定義

「生活に根ざした土着文化・思想に込められた普遍性を、現代の問題解決の取組の中で、具体化することによって、欧米近代を超える可能性を意味する」(「日・韓の近代化と民衆思想」2018年)

※北島著『宗教と社会変革：土着的近代と非暴力・平和共生世界の構築』(社会評論社、2022年)

・書評 ⇒ 「土着的近代」とは、「自己中心主義的」な排他的価値観を基軸とした「欧米型近代」に対し「それぞれの地域に存在する土着文化の核心となる相互関係性を基軸として、現代の課題を解決していく“近代”である」(『週刊仏教タイムス』2022年4月7日)

②原田憲一(元比較文明学会会長、元至誠館大学学長、1946-)：恵与書 2023年1月

「現代の危機をもたらした元凶は近代西欧の偏った自然観(西欧科学)と人間観(人間中心主義)です」「危機を克服するには、人間が芸術的創造を始めた5万年前からの歴史を振り返り、世界各地で育まれた知恵を発掘し、それらを再評価することによって、西欧近代の偏った価値観を相対化する必要があります」(『人間に必要な三つのつながり』ヴィッセン出版、2023年)

※参考：山本新(比較文明学者、1913-80、『周辺文明論：欧化と土着』刀水書房、1985年)

「土着の様式に外来の価値を刻み直すこと」⇒「埋め戻し re-embeddedness」or「重ね描き^{えが}」

「外来の普遍的価値を、最も土着的なものに結びつけること」

「外来の価値は、土着の様式に着色されてはじめて十全の価値として機能し始める」

③ハンナ・アーレント(『活動的生』森一郎訳)《折々のことば》朝日新聞 2023/03/01

「共通世界は、それがわずか一つの位相のもとで見られるとき、消失する」

※土着的生《仕事：職人的》→近代的生《労働：生産的》→活動的生《活動：人間的》へ

④大江健三郎：3月3日死去「周縁から世界を見つめ」《社説》朝日新聞 2023/03/15

・「米国を中心に世界を見ようとする姿勢」vs「周縁の視点」「周縁にあらうとする立場」を堅持
「中心の理屈」強大国、政治権力、多数派、都市部 vs「四国の故郷」周縁者、弱者、障がい者
・大江の姿勢＝「各自の専門から踏み出して思考する“アマチュアとしての知識人”の大切さ」

2, 土着 vs 近代 : 〈対立〉 構図

※二つの近代 ⇒ 旧近代 : 欧州近代 (戦前近代) vs 新近代 : 米国近代 (戦後近代)

①二つの価値 美空ひばり「東京キッド」右のポッケ夢 (明) 左のポッケチューインガム (新)

近代⇒西 欧・普遍・未来・文明・都会・契約・外発・^{流れ}flow・fast・商業・人間・効 率
陽・中心・天空・完璧・全体・お一人様・分離・進歩・自己・煌々・世俗・^{北 半 球}Global North
一元化・理・理性・無限・加速・前進・左派・乾燥・直線・男性・科学・リベラリズム
脳・**脳死、投資、向日性・屈光性**^{フォトリトロビズム}phototropism

土着⇒非西欧・固有・過去・文化・ムラ・身分・内発・^{保 有}stock・slow・農業・自然・非効率
陰・周縁・大地・瑕疵・部分・家族制度・一体・保守・他者・^{いんえい}陰翳・超俗・^{南 半 球}Global South
多様性・気・情緒・有限・減速・停滞・右派・湿潤・曲線・女性・宗教・パターンリズム
身体・心臓死、労働、屈地性・重力屈性^{ジオトロビズム}geotropism

②二つの世界の対立 : 新たな米ソ《ワト・ナト》戦争

※ ロシア (旧WTO : ワルシャワ条約機構) vs ウクライナ (NATO : 北大西洋条約機構)

- ・近代 ⇒ ウクライナ : 西欧の価値観に基づく「普遍・自由」
- ・土着 ⇒ ロシア : 民族の伝統・文化を重視する「固有・伝統」: ロシア正教

③二つの社会の運動形態

・移行

身分社会 (土着) → 契約社会 (近代) → 英国の法学者ヘンリー・メイン『古代法』1861年
ゲマインシャフト (土着 : 共同社会) → ゲゼルシャフト (近代 : 利益社会) → F・テンニース

・反転

近代 = 「開かれた社会」 「複雑な生 : 欲望拡大」 = 生命・躍動・推進・知性・自由 ⇒ 人類・宇宙
土着 = 「閉じた社会」 「単純な生 : 欲望制御」 = 物質・凝固・障碍・本能・必然 ⇒ 家族・国家
※ベルクソン「二重狂乱の法則」 ⇒ 「開いたもの」は「閉じたもの」に転じ「閉じたもの」は
「開いたもの」に反転 = 極端から極端へ振り子運動的な交替 (『道徳と宗教の二源泉』1932年)

④二つの人間観

リベラル・コミュニタリアン論争 The Liberal-Communitarian Debate、1980 後半～90 年代初頭

- ・近代的自己 = ジョン・ロールズ 「負荷なき自己 unencumbered self」 Liberalism
⇒ 歴史や伝統、集団や家族などあらゆる共同体から切り離された存在 「自立した個」
- ・土着的自己 = マイケル・サンデル 「状況づけられた自己 situated self」 Communitarianism
⇒ 歴史や伝統・都市・地域・家族などの諸共同体に組み込まれた存在 「関係的自己」

⑤二つの人間性向

ゲーテ『ファウスト』悲劇第 I 部 ⇒ ファウストが持つ矛盾的性向

- ・未来前進⇒「やむにやまれず、遮二無二に前へ前へと進み、自己を無限に拡大しようとする精神」
- ・過去回帰⇒「幼い頃から聞き慣れた合唱隊の歌声、思い出が俺に童心を蘇らせ俺を救ってくれた」

⑥二つの文明観

拙著『老年哲学のすすめ』（勉誠出版、2019年）

- ・〈強さ〉の文明⇒ ①の近代的価値：新自由主義・戦後日本教育の最大テーマ「個人の自立/自律」
- ・〈弱さ〉の文明⇒ ①の土着的価値：相互依存「依存的な理性的動物 Dependent rational animals」

3, 類似概念 ⇒ 対立二項の共存・調和

①儒教の理念・根本思想

- ・『論語』の主題「仁と礼」⇒ 仁（自他一体）＋礼（自他分離）
「仁」＝「真理は二人の間から始まる」仁＝二人（ヤスパース『孔子と老子』『ニーチェ(上)』）
「礼」＝ 調和原理「和」＋区別原理「離」⇒ 親しき仲にも「礼(離)」儀あり
- ・儒教の主題「修己・治人」⇒ 修己（對自己：求心的）＋ 治人（對他者：遠心的）

②「陰陽二元論」（『易経』）

- ・「陰陽合徳、剛柔有体、以天地之撰、以通神明之徳」（「繫辞下伝」）陰陽が万物生成・秩序の原理
「剛柔相摩、八卦相盪（剛柔、相い摩し、八卦、相い盪す（対立する二極が互いにこすれ合い関係することで万物/現象の生成・変化が生じる）（「繫辞上伝」）⇒ **palintropos harmonie**
- ・相反する性質を持つ陰／陽二つの気の相補・相克・創刊・相待・調和 ⇒ 宇宙の真理・原理
⇒ 量子力学ニールス・ボーア「**Contraria sunt Complementa**（対立する両者は互いを補完する）」
- ・小説：メインとサブ ⇒ 粒子と波動の二重性を「相補性」と命名
ドンキホーテ/サンチョパンサ、ファウスト/メフィストフェレス、シャーロックホームズ/ワトソン

③「孝」（儒教の基本徳目）

死に向かう「老」（おいかんむり）と生に向かう「子」という逆向き両者の合字「孝」⇒生命の連鎖性
「老」＋「子」⇒「生命連鎖性 **Generativity**」（米国の精神分析学者エリク・エリクソンの造語）

④「反発的調和 **palintropos harmonie**」（ヘラクレイトス「断片 51」）⇒ 『饗宴』187 a に引用

逆向きに働き合う力の対立と調和 ⇒ 対立二項の並存による相互創造
⇔ ヘーゲル「止揚」対立二項の統合・統一（対立の解消による一元化）

⑤「埋め戻し re-embeddedness」（カール・ポランニー『大転換』1944年ほか）

「産業文明は、新たな非市場的な基礎の上に再構築されなければならない」
人間に生きるに相応しい社会の形成 ⇒ 「経済」を「社会」に「埋め戻す re-embed」必要性

⑥「取り合はせ」（芭蕉作句論の一つ、向井去来『去来抄』1704年頃）

- ・俳句の基本原理＝相反する**両極の組み合わせ** ⇒ 大きな広がりとお行きをもつ句が誕生
芭蕉「鷹一つ見つけてうれし伊良湖崎」眼前に水平に広がる青海原 vs 天空高く舞う黒い小さな影
「荒海や佐渡に横たふ天河」夜陰に沈む流人島/うねる荒海 vs 見上げる空に蒼古無数の煌星
去来「おうおうといへど敲くや雪の門」せわしなく門を叩く黒い影 vs 音もなく降る白雪の静寂

⑦「対極主義 Polarism(のち「対極」)」(岡本太郎『対極と爆発』ちくま学芸文庫、2011年)

- ・パリ留学中、親友バタイユとアレクサンドル・コジューヴのヘーゲル「精神現象学」講義を聴講
- ・両極を融合・統合し一元化を図るのでなく、**両極間に激しく生ずる引力と斥力という動的な緊張**の中に、新たな創造を期す。⇒大岡信の日本詩歌論/日本文化論『うたげと孤心』集英社1978年
母・岡本かの子「桜花いのち一ぱいに咲くからに生命をかけてわが眺めたり」桜との一体化拒否
⇔ 西行「願はくは花の下にて春死なむ その如月の望月のころ」桜との一体化・桜への帰入

⑧「重ね描き」(大森荘蔵『知識と学問の構造：知の構築とその呪縛』旺文社、1983年)

- ・**密画的**世界観(近代的世界観)と**略画的**世界観(近代科学成立以前の世界観)の共生・調和
略画的**世界観**＝「我れ天地万物一体」(王陽明)という「人間と自然との親密な一体感・連続性」

⑨大谷翔平「二刀流 two-way」two-way player ⇒ 現代野球の過剰な**分業化・専門化**への挑戦

- ・投手⇔打者+盗塁 ⇒ 投げて良し・打って良し・走って良し ⇒ 万能選手 **all-round player**

※「君子は器ならず」(論語・為政)⇒中国の君子の理想像は「単なる**専門家** (Fachmann) すなわち己れを一面化すること (Vereinseitigung) ではなく、自己を**多面性** (Vielseitigkeit) や**全面性** (Allseitigkeit) へと開く**全面的な自己完成** (allseitige Selbstvervollkommnung) だった」
(マックス・ヴェーバー『儒教と道教』1947年)

4、「陰陽二元論」的なものへの評価・可否

①陰陽二元論：否定的 ⇒ 西歐的思考？

- ・パスカル
「ただ一つの思いがわれわれの心を占めており、われわれは同時に二つのことを考えることができない」(『パンセ』145)
- ・ベルクソン「**二重狂乱の法則** loi de double frénésie」⇒ **一極への収斂と反転**
「開いたもの」は「閉じたもの」に転じ、一方で、「閉じたもの」はさらに「開いたもの」に転じる
振り子運動的な発展法則 (『道徳と宗教の二源泉』1932年) ⇒ **極端から極端への無限反転運動**

- ・ジョージ・オーウェル「**二重思考 Doublethink**」 ⇒ 相矛盾する言葉の共存 ⇒ 混乱と納得？
「二重思考とは、ふたつの相矛盾する信念を心に同時に抱き、その両方を受け入れる能力をいう
Doublethink means the power of holding two contradictory beliefs in one's mind simultaneously, and accepting both of them.」(ディストピア SF 小説『1984年』1949年)
⇒ **思考停止・矛盾不感症**：政府が国民の思考を直接管理する**悪辣なコントロール法**として登場
「桜を見る会」2020年国会答弁⇒安倍首相「幅広く募ったが、募集はしていない」立法府！の長

②陰陽二元論：肯定的 ⇒ 非西欧的思考？ フィッツジェラルド「**二重のものの見方 Double vision**」

- ・F・スコット・フィッツジェラルド「**優れた知性 first-rate intelligence**」
「優れた知性とは二つの対立する概念を同時に抱きながら、その機能を十分に発揮していくことができる、そういうものである the test of a first-rate intelligence is the ability to hold two opposing ideas in mind at the same time and still retain the ability to function.
(村上春樹『風の歌を聴け』に引用、フィッツジェラルドのエッセイ『崩壊 The Crack-Up』1963年)
⇒ パスカルの択一哲学、オーウェル「**二重思考 Doublethink**」への反発？

5, 実践論 (実学) として

⇒ 近代の一極支配/進行に対抗し、日常・身近な「土着的なもの」を発見・再生

①土着の復活

- ・北島会長「**虫送り行事**」三重・四日市市富田地区に伝わる伝統行事を復活・実践
⇒ 「作物などの害虫を除くため、村人が大勢で松明をともし、鐘鼓を鳴らして、村はずれまで稲虫の作り物を送り出す行事」(広辞苑)「稲などにつく病虫害を追い払うための儀礼。村単位で行われる重要な**共同祈願**」(世界大百科事典第2版)「**呪術行事**」(大辞泉ほか)

②土着の消失

- ・私的体験「**共同湯**」 ⇒ 地域社会において再評価されつつある「銭湯」の存在価値
鈴鹿市農村地帯の旧集落地・妻の実家近くあった共同湯(男女別・10坪)の**撤去**(20年前)
光源は男女を分ける境目の天上に60w**裸電球**一つあるのみ ⇒ 谷崎潤一郎「**陰翳礼賛**」
撤去理由 ⇒ 各家庭に内風呂があるのに金銭と労力を抛出して維持 ⇒ **非合理的で無駄！！**
共同湯 ⇒ ゲマインシャフトの居場所/交流場、**共同体的関係性**を実感し実践する場所

II 熊沢蕃山「水土」論 ⇒ 差異の視点・多様性の確保＝普遍(近代)と固有(土着)の調和

①水土(国柄・風土・国民性)の違い

・国家方針を剛強的ハードパワーに置く誤り

「日本王道の長久なることとは^{れいがくもんじょう}礼楽文章(礼節・音楽・文学＝文化的・芸術的・ソフトパワー)を失はずして俗^{ぞく}に落ちざるを以てなり。いづれの国もと言ひながらとりわき日本は^{おご}奢れば^{ほろび}国亡る事すみやかなことわりあり」三輪物語・1685年

⇒ 260年後、明治以来の**軍事大国**化に伴う太平洋戦争の大敗北。1980年代後半～1990年代初頭のバブル経済に驕り踊った**経済大国**日本の人口激減・少子高齢化に伴う国難を予言？

・外国一極追隨を批判 当時の学者・知識人の多くは一極集中的な中国追隨「唐流」^{からりゆう}

「儒者など云者は^{いうもの}時によろしきの^{しいぜん}至善を知らで唐流を其儘^{そのまま}に述べ言へば、今時の要務^あに合はず。

日本の地^{現状}のよろしきに^{合致しない}応ぜず、日本の^位に当たらず」宇佐問答

⇒ 当時の「唐流」以上に、現代日本は「西洋近代」＝米国への無条件追隨の極端な「米流」^{アメリカ}化。

②水土論

・藤樹「時と所と位と三才(天・地・人)、相応の^{しいぜん}至善をよく分別して、^{まなこ}万古不易の中庸を行ふを眼とす」(『翁問答』上巻之末)

・中庸「^{孔子}仲尼、堯舜を祖述し、文武(文王・武王)を憲章す。上、^{のつと}天時に律り、下、^よ水土に襲る」 ⇒ 天時(天の道：普遍) + 水土(地の道：固有) (『中庸』第30章)

・蕃山「堯舜文武、上、^{のつと}天の時にのっとり、下、^よ水土により土を安し、人に厚く、人情・事変を通じて、人民、倦むことなきの実は変わりなし」「^{のつと}事変(外見的事象)に通ずるは天時にのつとるなり。人情を知るは水土による也。水土は人情・風俗にあらわるるもの也」(中庸小解・下)

※ 天時＝事変(近代) 普遍への道：科学・世間の必然 ⇒ 人間がもつ本能的「未来前進」志向

「衆と共に行ふをもつて大道とす」集義和書5

「衆の従ふ所のものは必ず至当(必然的妥当性)あり」同11

「衆と共に進むべし。己ひとり名誉をなすべからず。衆のなすまじきことを行ふ者は、天下の師たるべからず」同4
⇒ 衆(大衆)の「近代」への願望と傾斜

※ 人情＝水土(土着)固有への道：国情・風土・歴史・文化・伝統・習俗 ⇒ 本能的「過去回帰」志向

「日本の水土人情によつて、あまねく用ひて久しかるべき祭法あらん」集義外書16「水土解」

「日本の水土(風土・国情)に根ざした固有の精神・文化は、中国やインドといった他国には貸す出すことも、かれらがこれを借り受けることもできない。しかし、学問や科学技術は別であつて、互いの貸し借りは何の問題もない」同

- ・時処位論 ⇒ 普遍的「道」に対する固有の「法」（時代・土地柄・立場）による修正・改変。
- ・水土論（時処位論の土着的展開）
 - ⇒ 「土着」という差異への視点、多様性の確保

III 蕃山：対立二項の同時存在

①丸山眞男の蕃山評

この時代における逸すべからざる学者になほ熊沢蕃山がいる。しかし彼は理論的な思惟よりもはるかに具体的な社会経済政策において、さらに実際政治家としての経綸において偉大であつた。ひとは彼の著、たとへば集義和書において、全く陳腐な道学的説教が、個々にではあるが非常にすぐれた経験的洞察と肩をならべてゐるのに、珍奇の觀を禁じえないであろう。”愚が名は虚なり。何ぞ其虚名をいだきて物知り顔に人の師たる任をになひ侍らんや”と自懐する蕃山は単なる儒者を以て律しえない多面的な存在である。（『日本政治思想史研究』1952年）

②岡山出身の経済史家・京大教授、黒正巖（1895—1949）

「非凡なる人格に敬服する所頗る深きものがある」「徳川時代の政治経済思想を理解する為めには必ず蕃山を知らねばならぬ」「不世出の一大人傑」（「熊澤蕃山研究序説」1937年）「徳川時代の学者として亦政治家として最も卓抜した人」であるが「あれ程有名であり乍ら蕃山くらい本体の判つて居らない者はない」（「熊澤蕃山の経済論」1935年）のは、蕃山には「二の相反馳せる性格」があつたためではないか（「熊澤蕃山研究序説」）

③同時代人の両評価

- ・崇拜者からは聖賢・大君子として大名や公卿らから尊崇される一方、幕府や岡山藩士、僧侶、林羅山や山崎闇斎ら御用学者・朱子学者、藤樹派の学者にも批判・敵視されるなど、両極端の評価。

④相反する二つの肖像画

- ・湯浅常山『文会雜記』1782年

「当時の蕃山を見知る古老の話では、蕃山は婦人好女（美女）のような容貌だった」

- ・四日市出身の儒者、山田三川（1804—62）の人物逸話集『想古録』

蕃山の肖像画には「容貌魁偉にして気骨人を圧」するものと「柔和温良を究め」たもの、すなわち豪傑風と美女風という全く相反する二種類のものがあった。

- ・古来、蕃山の肖像画には「鬼をも挫く益荒男」というきわめて男性的なものがある一方で「容貌婀娜として手弱女」のような美女風のものという両極端なものが存在。

⑤岡山・蕃^{しげやま}山村（隠棲地・邸宅跡あり）の両面性（前近代 vs 近代）

・人影ほとんど無く緑豊かで閑静な山里 ⇔ 時たま轟音をたて疾駆する白い車体の新幹線

※ 土着的近代研究会編『土着的近代研究・創刊号』は文理閣から4月出版予定です。

日本東アジア実学研究会からは

板垣雄三先生（巻頭論文）

北島義信先生

片岡龍先生

趙晟桓先生

大橋

以上5名が参加・執筆しています。